
やみけん

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やみけん

【Nコード】

N9781X

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

爆発してもいい

リア充になれるなら。

プロローグ

振り返ってはいけない。

「おーい、その人！」

だれが呼ばれているかわからないときは、振り返ってはいけない。

「おーい、そのパツとしないメガネの人！」

明らかに侮辱されているときは、振り返ってはいけない。

「おーい、そのアイドルグループからあえて人気の低い地味目の子を選んで『この子ならイケるのでは？』と言う本心を隠して『ちよつと人とは趣味が違うからね』と悦に入っちゃうけどアイドルの時点で『趣味が違う』の範疇には入ってないダメな人！」

根拠のない決め付けを受けたときは、振り返ってはいけない。

「おーい、おーい！ 聞こえてますか？」

「……」

「おーい、木村くん！」

どこにでもいる名前と呼ばれても、振り返ってはいけない。

「おーい、1年B組、木村繁しげ！」

いきなり呼び捨てで名前を呼ばれたときは、振り返ってはいけない。

入学三日目。

昇降口から校門へ向かうのならかなスロープを繁は振り返らずに歩いていく。桜の花びらを不機嫌に蹴散らす彼こそが、さきほどから呼ばれている『そのパツとしないメガネのダメな人』であることは、同じように下校する生徒たち皆が気付いている。

振り返らなかつたからだ。

その場にいた全員が、校舎の窓から呼びかける甲高い声に振り返りつたのに対して、一人だけ振り返らず早足で去っていく繁の存在が逆説的に目立った。

「木い村あつ！」

二階の窓から身を乗り出して、声の限り少女が叫んだ。

「木いい村あああつ！ 無視すんなあつ！」

「……」

校門を出る一步手前、学校の敷地ギリギリで繁は立ち止まる。

振り返ってはいけない。

それを何度も自分自身に言い聞かせていた。

「木いいいいい………いつ？」

騒音に近い叫びが突如途切れたのと、背後でどよめきが起こったのは同時だった。

呼ばれて振り返ったのではない。

そう心の中で言い訳をしながら繁が振り返ると、校舎の窓から少女の身体が飛び出しかけている。窓枠こそ掴んではいたが、上半身が完全に飛び出してしまったばたと両脚が空中で足掻きながら、さかさまにぶら下がっている。女子生徒から悲鳴があがった。

繁の耳の奥で血の気が引く音がしていた。

「八重やえがし樫さん！」

そう叫んで、校舎に向かってスロープを駆け上がる。

舞い散る花びらを払うように大きく腕を振り、転びそうなほど前傾姿勢でみつともなく走る。見上げて走っていたので校舎下の花壇でつまづく。完全にバランスを崩した少女のスカートが裏返しになつてピンク色の下着が見えたのと、繁がその直下に転がり込むのはほぼ同時だった。反射的に両腕を広げる。

「ごめん。キャッチして？」

重心が完全に窓の外に出た瞬間、引きつった笑顔で少女は繁に懇願した。

「ムチャな……っ」

しようとしていたことだが、繁に自信はなかった。

その直後、くると回転して落下してきた少女の尻が、彼の顔面に直撃する。

高校入学初日。

「八重樫栄、あたしが日本を良くします！」

それが彼女の自己紹介である。

ウケ狙いの自己紹介のことごとくがスベった後で、名簿順ラストだった栄の発言は1年B組の中で優しく受け流される。愛想笑いもそろそろ限界だった。「選挙演説か！」という丁寧なツッコミも「良くなるか！」という素朴なヤジもなにもない。

「これからよろしくおねがいます！」

栄は思い切り頭を下げて、机に頭をぶつけた。そこだけ小さな笑いが起きた。

小さい。

釣られ笑いをすることもなく、繁はそれだけの感想を抱いて前を向いた。

身長的な意味で、栄は小さかった。

教室の机が不釣合いに見えるほど体格に恵まれていない。オシャレではないショートヘアの一箇所だけゴムバンドで括った姿は、セーラー服を着ていなければ小学生にしか見えなかった。その制服も明らかにぶかぶかである。袖口はあまって指先しか出ておらず、細い首の先の胸元はフラットでリボンが頂垂れ、規定通りであろうスカート丈は身体の凹凸のなさ故かやけに重力にまっすぐ引かれて長く見える。

発言のスケールが中途半端に大きいせいで、その小ささがより際立っていた。

「……じゃー、一通り、で」

椅子に座っていた担任は、眠たげな目で教壇に上がる。

「えー、本来は担任をやる予定だった女教師が昨年度末に電撃的に結婚してあっさり辞めてくれやがったので繰り上がりで担任になった、年は二十九歳。オッサン手前だ。仕事だから勉強は教える、進学や就職についての相談も受ける。しかし人生については自分で学べ。ついでに言っておくとゲイだ。男子も女子も、担任がそいう

人間であるということ踏まえて、節度ある距離感でやっていこう。以上」

妙につるんとした額を撫でながら言う。

冗談なのか本気なのかはかりかねて教室が静まり返った。それでもこの日、一番インパクトのある自己紹介だったことは間違いない。結果的に全部持っていかれていた。

はずだったのだが。

「じゃー、クラス委員を決めとく。ホームルームとか、ここからの進行は任せる。推薦ってことはないと思うのでやりたい者がいれば」

「はいっ！」

静寂を切り裂くように椅子から腰を浮かせて手を挙げ、栄が立候補する。

「えー……、出席番号三十二番、八重樫、決定」

担任はそう言うと、壇上で手招きをした。

ててて、と小走りなのか、小さいからそう感じられるのかわからない歩行音を立てながら、座ったクラスメイトたちより少し高いぐらいの頭が教室を縦断する。

「じゃー、このプリントの内容、やつといて」

長身の担任が明らかに腰を曲げて紙を手渡した。

「わかりました」

右サイドに結った髪をぴょんと跳ねさせるように頷く。

そして教卓に立つ。首から上しか見えない。

「クラス委員になりました。八重樫です。日本の前にクラスも良くします」

そのネタ引つ張るのかよ、そんな微妙な空気が教室内に漂う。

「では、もう一人のクラス委員、やりたい人いますか？」

だれも手を挙げない。

元気が取り柄ってことか、と繁はぼんやり考えていた。

「いませんか？ なら、時間もムダになるので、あたしが指名しま

す。いいですか？」

だれも反応しない。

「異論ないようなので、指名しますね。……そのメガネの人」

一瞬の沈黙を挟んで、栄が指さす。

「ん？」

思いつきり目が合っていたが、繁は背後を確認する。メガネはいない。

そして、気付くと前後左右のクラスメイトたちが彼を見ていた。よほど鈍い人間でなければこれ以上とぼけようがない。メガネという道員名で呼ばれようとも。

「そのメガネの、冴えない人」

教卓から移動して、繁の列の前に立つと、栄はさらにダメ押しする。

「え？ つと、僕のことですか？」

思わず自分を指さして、繁は表情を曇らせた。

彼自身、自分がそれほど冴えた男っぷりを持っていないことは自覚していたが、初対面のクラスメイトにそれを指摘される筋合いはどこにもなく、そんなことを言われてクラス委員に指名されるといふのもわけがわからなかった。

「はい。放っておくとクラスで友だちも作れず、浮いた存在になって、クラスに居場所がなくなりそうな……出席番号十二番の木村くん。あなたです」

よどみなく言うつと、栄はニツカリと笑った。

幼い顔立ちに似合う満面の笑みだったが、齒に衣着せないにもほどがある。

「そんな風に言われて、だれが『やります』なんて……」

内心の苛立ちを押し殺しながら、繁は婉曲に拒絶の意思を示そうとする。

「木村くん、今クラスに友だちいます？」

それを遮って、栄は質問した。

「はい？」

言われて繁はクラス内を見回したが、友だちはいない。

見回したのはアリバイみたいなもので、もちろん、わかっていた。

「いませんですけど……でも、入学したばかりで」

「自己紹介で中学は私立だって言っていたのは聞きました。中高一貫が売りの。公立に移ってきたばかりってことはわかっています。

元の学校の同級生がいないことはともかく、今朝、入学式から、これまでにだれかとちゃんと会話しました？ はじめましてとか、よろしくとか、直に係性を築くような会話。だれか、木村さんと喋りました？」

教室内に向かって栄は問いかける。

だれもなにも言わなかった。

「ほらね？ 事実だ」

栄は肩をすくめながら歩き出す。

「だからって、それとこれとは関係ないような……」

「関係ある！」

ぼそぼそと呟いて俯いた繁の机に手を置き、栄は言い放った。

「あたしは最初に言いました。やりたい人がいないなら、指名する、と。それでいいかどうかも尋ねました。なんの異論も反論もありませんでした。みんな自分が指名されることはないと思ってなにも言わなかったのかも知れない。それでも、この場をあたしに委ねたことは事実。だからこそ、どんな基準でだれを選ぼうとも、それがあたしの指名である限り、関係はある！ なにか問題ありますか？」

「……」

繁は沈黙し、クラスメイトは息を飲んだ。

「ということで、もう一人のクラス委員は木村くんに決定しました」

栄はそう言いながら、繁の手を取って教壇の上に連れていく。

「はい、ではあいさつをどうぞ」

「……木村です。よろしくおねがいます」

どこか空ろな繁に、まばらな拍手が贈られた。

「はい、みんなでいいクラスにしていきましょう。では、さくさく次に行きます。まずは掃除当番について、このクラスの担当場所は六箇所ありますが」

そこからは栄の思う壺だったのかもしれない。

弛緩したホームルームが一気に緊張を帯びた。面倒な役回りに立たされてはかなわないとクラスメイトたちの闊達な意見が取り交わされ、それでも全体の進行は栄がスムーズに運ぶ。そこにはある種の一体感さえ生まれていた。担任の唐突なカミングアウトの印象も霞むほどに、栄はクラス委員として派手にデビューした。

「僕をスケープゴートにして」

ホームルームを終え、繁は黒板の文字を消しながら言う。

「そんなにクラス委員イヤだった？」

栄は学級日誌を書きながら答えた。

クラスメイトが帰った昼前の教室には二人しか残っていない。

「理由がアレじゃなきゃ素直に受けた、と思う」

強がることぐらいしかできない。

「ホント言うと、実は、あたしもクラスに友だちいなかったんだ」

「え？」

繁は振り返った。

「あたしの住んだとこ、過疎地で、中学も全校生徒が五人しかいなくて、だからこの高校に来たのも一人で、それでなんとなく木村くんの自己紹介にピンと来たんだよ。このままだと、あたしも木村くんもクラスで浮いた存在かも？ って」

栄はそう言って舌を出した。

「だとしても」

「強引でした。はい。冴えないとか言ってごめん。浮かれちゃったんだよ。大勢のクラスメイトがいて、こういうのが普通の学校なんだって思ったら楽しくって」

言いながら、嬉しさを堪えるようにはにかんだ。

「そう……」

正直に言われたのでは嫌味も言えない。

毒気を抜かれた思いで、繁は黒板消しをはたく。こうして出会わなければ、自分もクラスで浮いた存在のままだったかもしれない。好意的に考えれば。

「木村くんは学校楽しくないの？」

椅子に座ると床に届かないらしい足をプラプラさせながら栄は言う。

「八重樫さんほどでは」

余計なお世話。頭に浮かんだその言葉を繁は飲み込む。

そして三日目には、

「じゃ、クラス委員、あと頼むよ！ 用事あつから」「わたしたちももよろしくー。木村くん」「ほんと、ごめんねー？」「あ、おれもおれもっ、わりーな」

「……うん」

繁は体よく使われる側に回っていた。掃除当番などは顕著に押し付けられる。頼まれれば断れないヤツ、という印象がクラス委員決定の経緯でクラスメイトに深く印象付けられた結果だった。事実、頼まれれば断れない。その上きちんとなしてしまふ。真面目とか正直とかいう美点ではない。単純に、気が小さくて、弱い。それだけだ。

栄のせい、というものでもない。

遅かれ早かれこういうポジションに落ち着く。教室を一人で掃除しながら、繁はそう自分を納得させていた。実際のところ、以前の学校ではそれがエスカレートしていじめにまで発展したので逃げてきたのだ。小学生のときもあった。おそらく、そうさせる要因が自分にはある。そう理解するしかなかった。相手がそうせずにはいられなくなる理不尽なものを抱えているのだ。宿命的に。

人は平等ではない。

「木村くん、そのままでもいいの？」

気付くと、栄が教卓の上に座って脚を組んで、座っていた。

「……………」
見られていた。

鼻の奥がつんと熱くなつて、繁は奥歯を噛み締める。なにも言えない。残りの机を元通りに直していく。言葉を口にしようものなら泣いてしまいそうだった。

「本当にそのままでもいいの？」
教室の外には放課後の喧騒がある。

「木村くんがなにも言わなかったらなにも変わらないよ？」

しかし、栄の澄んだ声はよく響いて通る。

だれも答えなかった。

答えるまでもないことだ。繁にもわかる。どこかで変えなければ、この状況は一生ついて回る。人と人とが縦横に交わり紡ぎ出される社会で黙っていることに価値などない。言葉にしなければ、動いて示さなければなにも変わりはない。

窓をすべて閉め、掃除用具をロッカーに放り込むと、繁は鞆を掴む。

「木村くん……………」

栄がなにかを言うのを遮るように、繁は乱暴に扉を開ける。

「さよなら、八重樫さん。また明日」
逃げた。

逃げるのが繁の選択だった。そのつもりで学校を変えたのだ。三年なら我慢できる。それが中学で得た結論だった。ならば我慢すればいい。高校三年。大学もどうせ就職活動で三年程度。先のことまでは考えられない。逃げられるところまでは逃げるしかない。

駄目な時は、駄目な時だ。

一瞬、意識が飛んでいた。

「……………」
その結果が……………」
ずきずきと痛む後頭部を感じながら、繁は目の前にある小さな尻

を見ていた。自分が無事なのだから、おそらく落ちてきた相手も無事だろう。そのことにはホツとしつつも、次第に無鉄砲な振る舞いに怒りが込み上げ、その尻を衝動的に叩いた。

「ぺちん。」

「きゃん」

びくんと背筋を仰け反らせて、栄はスカートの裾を治して花壇の土の上に正座した。

「ちよつ、木村くん？」

「恥ずかしそうに唇を窄めている。」

「もういいから、僕には構わないで」

「そういうわけにはいかないよ、た、助けてもらったし？」

「成り行きだよ」

繁はうんざりしながら答える。心配気な様子の生徒が周囲に集まり、教師らしき人影が走ってくるのを視界に入っている。この始末は面倒だ。

「あのさ」

「なに？」

「ぶつきらぼうに言って、」

「木村くん、リア充になろうよ」

見ると栄は真剣な目をして繁を見ていた。

「リア充？」

言葉の意味はおよそわかる。しかし、

「言ってる意味がわからない」

繁はそう言うしかなかった。なるものではない。そういうものだと理解していた。人は生まれながらにしてリア充するかしないか決定している。

「大丈夫」

しかし、栄はにつこりと笑っていた。

「なれるよ、絶対」

結わえた毛の先についた土を払いながら深く頷く。

それがすべてのはじめだった。

プロローグ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
ご意見、ご感想ありましたらお気軽にどうぞよろしくおねがいします。

第1話 やみけん誕生

二階からの飛び降り事故の後始末。

教頭、学年主任からの説教を経て、最後が担任だった。

「まあなんだ、高校入学で浮かれてんじゃないってことだ。幸い今回はさしたる被害もなかったから良かったようなものの、一歩間違えば大事故だ。わかるか？ お前らが痴話喧嘩するのは勝手だが、そんなものの後始末は教師の仕事じゃない。学校外でやれ」

「……はい」

これまで、自分には一分の非もないと訴えようとしては「言い訳をするな」と説教が長引いたのでもう繁には痴話喧嘩を否定する気力もなかった。

だが、

「お言葉ですが、先生。男女がこうして多数集う学校と言う場において、恋愛沙汰はもとより、痴話喧嘩が起こるのも必然です。そういった自然な社会の有様を仕事ではないからという理由で避けて通って教育者が務まるものなのでしょうか？」

栄は余計な方向へ話題を広げようとする。

繁の「言い訳」もそうだが、説教が長引いたのはこの空気を読まない彼女の態度が一番大きかった。「ごめんなさい」と言えば済む、そういうタイミングを悉く潰している。火に油を注ぎながら別の場所に火を点けて回るような舌禍の塊である。

口を塞いでやりたい。

「……」「……」

繁と担任はお互いに同じ考えであることを目で確認し、

「木村」「はい」

頷きあった。二時間にも及ぶ説教リレーの参加者同士、そして同じ女を憎たらしく思う者同士、友情にも似た奇妙な感情が芽生えつつあった。

「え？ なに？」

「このようなことが二度とないようによく話し合います。」迷惑をおかけしました！」

繁は戸惑う栄の頭を掴んで一緒に頭を下げる。

「よし！ 話し合いの結果は反省文にして提出しろ！」

担任はわざとらしく謝罪を受け入れる。

「はいっ！ 失礼しました！」

もう一度深々と頭を下げる。

「ちょ、っと、まだ話は終わって……」

「さあ行こう八重樫さん、反省文を書かなくちゃー」

棒読みの台詞を口にしながら、繁は栄を強引に引っ張って職員室から出ていく。

「木村くん？ なんとか言っつてよ、ねえっつてば？」

うるさく喋りつつける栄を昇降口まで引っ張ったところで、繁は手を放した。

「……はあ」

そのまま溜息を吐いてしゃがみ込む。すっかり日も暮れ、生徒の姿もなくなっている。掃除をやらされるぐらいで済む筈が、いったいどうして理不尽に迷惑なクラスメイトに絡まれることになってしまったのか、理解できない。

「リア充になるチャンスだったのに」

「あのねえ、八重樫さん？ いい加減なこと言ってるよ流石に僕でも怒るよ？」

栄の呟きに流石に頭にきて繁は語気を荒らげた。

「？ だって、問題児ってリア充でしょ？」

栄はケロリと答えた。

「なに言っつてんの？」

「要するに『オレはようやく登りはじめたばかりだからな。このはてしなく遠いリア充坂をよ……』ってことでしょ？」

ぐっと拳を握りしめて、栄は力強く言い放つ。

「……………はい、未完」

もう相手の言葉をわかつとすることを繁は放棄した。親切に付き合うから付け上がるのだ。無視するしかない。そそくさと立ち上がって靴を履き替える。

「そんなー？ 邪険にしないで今後について話し合おうよー、木村くーん」

「……………」

「強引でした。はい。ごめんなさい。そうだよ。自分から問題を起こしてるならともかく、そのつもりもなく問題児になっちゃうのは充実の方向性が違うよね。でもさ、なんていうか、昔ながらの不良感とリア充は近いと思わない？ 先生と生徒が近いっていうか、ドラマチックな人間関係があるというか、憧れない？」

「憧れない」

言わんとするニュアンスは把握したが繁はバツサリと切り捨てた。「そう？ でも、あたしが言いたいことはさ、リア充ってというのは、人間関係が濃密な中を生きている人のことってことだよ。それはわかるでしょ？」

栄は繁の態度など気にする様子もなく、まくし立てる。

「……………」

「結局のところ、そうなんだよ。希薄な人間関係ではリア充には近付けない。そのことに気付いた時、あたしは決めたの。日本をリア充の国にするって！」

バカだ。

ちよこちよここと小走りに後を追いかけてきながらおよそ理解できないことを喋りつづける栄を振り返らず、繁は心の底からそう思った。校門へ向かうスロープに散った桜の夕闇に灑んだ花びらをくしゃくしゃと踏みしめる。同じピンク色であっても、散ったものと咲いているものでは別物だ。そんなことは見ればわかる。

なにからなにまで間違っている。

「……………あのさ」

学校から一步踏み出して、繁は振り返った。

「ハッキリ言うけど、そういうことを考えてる時点で、八重樫さんはリア充じゃない。僕が思うに、本当に充実している人は他人が充実しているかどうかなんて気にしない」

二人の間に風が吹く。

「そうだよ？ あたしもリア充じゃない」

栄はにっこりと笑って言った。

「だからこそ、リア充になりたいと思う。一度きりの人生なんだよ？ 充実したいし、満たされたい。なれるなら爆発したっていい。

木村くんは、なりたくないの？」

「なるものじゃないんだ、たぶん。それは……」

「そうやって諦めて、ずっと充実しない人生を送るの？ 我慢して？ 自分はそう生まれなかったって？ そういう性格だって？ 星の巡りだって？ 運命だって？」

「……そんなの、追い求めたって」

理想郷がどこにもないことはだれでも知っている。

リアルが充実するとはなんなのか、どこまで行けば本当に充実するのか、際限ない欲望の果てなき拡大ではないのか。終止符など打ちようもない。いつかどこかで諦めるのだ。だとすれば最初から諦めても状況は変わらない。充実など夢想到過ぎない。

繁は俯いて散った花びらを見つめる。

「キリがない」

栄はそう呟いて、繁の正面に立つと、俯く顔を見上げた。

「でも、現状維持よりはマシ」

見開かれた栄の瞳に、満開の桜が映る。

「擬似でも似非でも贋作でも構わない。少しでもリア充に近付く。そのためにはあたし一人じゃダメ、できるだけ大勢、みんなでリア充になる。そのための第一歩が、どこから見ても冴えなくてパツとしない木村くん。平凡以下でもリア充になれるならば、だれでもリア充になれると信じられる。そういう理想的な非リア充感があなた

にはある！」

「……酷い言われようだ」

思わず繁は苦笑いした。

「ごめん。でも、事実でしょ？」

栄はポンと繁の肩を叩く。

確かに、その言葉には嘘も虚飾も誇張もなかった。

なれるものならば、なりたくないわけではない。

栄の言葉を百パーセント信用したということではなく、少なくとも、繁の立場において損がある話ではなかった。もとより高校生活に夢も希望も抱いていなかったのだから、言葉を借りるならば「現状維持よりはマシ」というだけのことである。

リア充を目指すのは悪くない。

「部を立ち上げよう思うのですが、先生、顧問やっていただけませんか？」

でっち上げた反省文を手渡してすぐ、反省の色などというものは微塵も滲ませることなく担任にそう告げる栄の姿に、繁は頼もしさすら感じていた。

「……お前らが？ なんの？」

「地域の活性化とその方法を研究する部（仮称）です」

先に提出した反省文よりきっちり書き込まれた、部活動申請書類を差し出す。

「（仮称）って八重樫……」

「どっちにしても部員五人集まるまでは単なる同好会で部費も出ないので、名前は後回しです。とりあえずどこかの教室の使用許可を貰うためなので、先生の名義だけ貸していただければ、あとはあたしたちで勝手にやりますので、ここに名前と印鑑を」

実際、この強引さは見習うべきものがある。

迷惑はかけないから、と既に迷惑なセールストークを繰り広げ、担任に顧問になる同意をとりつけ、生徒会に申請を出し、活動休止

状態だったボランティア同好会を引き継ぐ形にすることで空き部室を手に入れ三日後にはこれを認めさせた。

手際が良すぎる。

「……ある意味、リア充だよ」

これだけの行動力があれば、既に。

そんなことを思いながら繁は埃まみれの部室を掃除する。体育館裏の日当たりの悪いプレハブを仕切った三畳ほどの微妙な広さに、教室と同じ机が五つと、掃除用具のロッカー、そして古びた本が押し込まれたスチール本棚。窓を開けると体育用具室のブロック塀、空きっ放しになっているだけはある環境だった。

一通りの埃つぼさを取り除き終えたのを見計らったかのように、部室の扉が乱暴に開かれた。生き生きとした笑顔の栄がいる。

「ごめんごめん。掃除任せちゃって」

どこから持ってきたのか、ホワイトボードを引っ張ってきている。「他にできることないから……」

「いやいや、木村くんがないとはじまらないからね」

栄はそう言いながら、椅子をもつてくるとその上に乗る、赤いペーンでホワイトボードに何事かを書き込みはじめる。後姿は子供が落書きしているようでもあったが、

《八重樫 見合い 研究会》

きつちりとした力強い文字が並んだ。

「見合い？」

「待って、説明には順番があるから」

こほん、と咳払いをすると、栄は椅子から飛び降りた。

「非リア充がリア充になる、もっとも手っ取り早い手段とはなにか！」

「……は？」

「そう、リア充と人生を共有することだ！」

栄は拳を突き上げる。

演説がはじまったらしかった。

「充実している人のそばにいる人は充実する。これは普遍的法則だ！ 例を挙げよう、偉大なスポーツ選手の家族ならば、妻であれ子であれ、家族であったということだけで、もれなく充実のおこぼれに与っている。偉大な政治家の家族、偉大な作家の家族ならば、その真実を語るといふ栄誉を与えられる。美男子、美人と付き合つ、もうぶつちやけそれだけでリア充！ とにかくリア充に近付く、それが最善にして最短、最高の手段！ リア充からリア充の恩恵を受け、自らもリア充となる。これ以上の道があるだろうか！ ありはしない！ 断じてありはしないのだ！」

語気は荒かったが、

「……他人任せ？」

結論はそうだった。繁は思わず呟く。

「そつだよ？」

あつけらかんと栄は答えた。

「そつだよ、つて……」

「だってさ、リア充になるって言ったつて、リア充じゃないあたしたちからしたら、なにをもってリア充なのがまるでわからないわけじゃない？ だとすれば、リア充と人間関係を持つことが一番手っ取り早いし、それを利用するのが筋。だからこそ、人生に影響を与えるレベルまで接近しなければならぬ、友だちじゃ不十分、だから……」

「見合い？」

先回りして繁は言った。

「そう、真剣なお付き合い」

栄は深く頷く。

「僕が？」

「木村くんが」

「見合い」

どうしようもない長い沈黙が部室に流れた。

高校生が、学校で、部活動として、見合いをして、リア充になる。

徹頭徹尾おかしい。ありえない。

「どう？　すごいアイデアでしょ？」

しばらくして、栄はわくわくした表情で繁に尋ねる。

「すごい、意味わかんない、アイデア」

繁は正直に答えた。

「えー？」

「えー、じゃなくて。第一というかまず、高校生は見合いしないし

……」

「あ。それは大丈夫、ゲリラ見合いだから」

わかっていた、という風に、栄は繁の言葉を遮った。

「ゲリラ、なんだって？」

「ゲリラ見合い。二十一世紀の見合いの形よ」

「……」

自信満々に言う栄に、繁は返す言葉を失った。

「ボランティア同好会は世を忍ぶ仮の姿」

栄は青いペンでさらに書き込む。

「しかしてその実体は！」

《高度に発達した見合いは、恋愛と区別がつかない》

「これが八重樫見合い研究会、略して『やみけん』のキャッチコピーにして活動内容！」

「やみけん」

どこまでも意味不明で怪しい部活が誕生した瞬間だった。

「ということ、さっそく木村くんにはリア充カノジョを作っても

らいます！」

「早まった」

そう嘆いても遅かった。

「見合いは数だよ、木村くん！」

そう言いながら、栄は鞆から紙の束を取り出して机の上に置く。

「これは？」

「いわゆる見合い写真だね。あとプロフィール。なかなか手間だっ

たよ？ 学校中を走り回ってフリーのリア充を探して写真を撮らせてもらって、ボランティアに興味はありますか？ みたいな質問から話題を広げて趣味とか好みのタイプとか聞き出して……」

「ふーん」

リア充じゃないか。

にこやかな写真をめくりながら、繁はそう思った。相手がにこやかに応じているということはコミュニケーションが取れていて、快く写真撮影に応じてくれたということだ。その時点で普通じゃない。添付されたプロフィールもそれなりに詳細だ。

若いながらに見合いババアとして栄はリア充している。

「どの子が好み？」

「……どの子って言われても」

リアルな見合いってこんな感じなのだろうか。

そんなことを思いながら、取り返しのつかない列車が走り出してしまったことを繁は感じていた。これだけの労力を目の当たりにしては、気の小さい彼には降りることさえかなりの覚悟を要する。

第1話 やみけん誕生（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9781x/>

やみけん

2011年11月3日22時04分発行